

湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

所 属 保健医療学部看護学科
名 前 碓井 瑠衣
作成日 2026 年 4 月 20 日

1. 教育の責任

湘南医療大学は、ふれあいグループの基本理念である「人を尊び、命を尊び、個を敬愛す」を建学の理念として掲げている。この理念は大学のみならず、グループ全体が社会に奉仕し、すべての人々の幸福に寄与することを目的としたものである。私たち教員は、この理念の実現を教育を通じて果たしていくという責任を自覚し、日々の教育活動に取り組んでいる。

これまでに担当した科目、および本年度に担当している科目は以下のとおりである。

【保健医療学部 看護学科】

ナーシングスキルⅠ・Ⅱ、ヘルスアセスメントⅠ、ナーシングプロセスⅠ、現代医療論、チーム医療論Ⅰ、地域看護方法論、プロフェッショナル論Ⅰ・Ⅲ、看護基盤実習Ⅰ・Ⅱ、統合実習

【大学院 保健医療学研究科 保健医療学専攻】

感染看護学特論Ⅱ、健康増進・予防特別研究

【大学院 保健医療学研究科 保健医療学専攻 博士課程】

地域生活ケアシステム学特論

その他として取り組んでいる教育活動は下記の通りである。

- ◆ 3学年のチューター
- ◆ 学生支援委員会委員（大学祭担当）
- ◆ 入試広報委員
- ◆ 入学前教育委員

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

私の教育理念は、「異文化理解」の重要性を学生に伝えることであり、「異文化を理解しようとする姿勢をもって看護を提供すること」の大切さを教育の中で共有していきたいと考えている。

「異文化」という言葉からは、しばしば外国や海外を連想しがちであるが、実際には私たちの身近にも異文化は存在している。「文化」とは、人間が自然や風土との関わりの中で築いてきた生活様式、価値観、行動様式などの総体であり、すべての人が自身の文化を背景に生きている。そして、自分とは異なる文化に触れたときに、違和感や戸惑いを覚えるのは自然な反応である。重要なのは、そうした感情に気づきつつも、相手を理解しようとする姿勢を持つことである。

看護とは、対象者の生活に寄り添い、より健康な生活の実現を支援する営みである。対象者の生活は一人ひとり異なるため、看護実践には常に異文化理解の視点が求められる。相手を「異文化」として受け止め、自分自身の常識や価値観を押しつけ

ないこと——この姿勢を、私は教育を通じて学生に伝えていきたいと考えている。

2) 理念をもつに至った背景

この理念を持つに至った背景には、私自身の看護学生時代の経験がある。大学進学を機に、生まれ育った地元を離れて初めて暮らす地域では、日々の生活において、慣習、方言、文化的行事、地域の営みなど、今まで知らなかった多様な文化に触れる機会が多くあった。それらは私にとって「異文化」とも言える新鮮な体験であり、当初は戸惑いや驚きの連続であった。同じ日本においても、これほど多様な文化が存在していることを知り、自分が当たり前だと思っていた価値観が、実は限られた環境によるものだったと痛感した。この原体験は、その後、さまざまな地域や人々と関わる際の基盤となり、異文化に対して柔軟な視点を持つ大切さを私に教えてくれた。看護師として、また教員としても、対象の文化的背景を尊重し、理解しようとする姿勢は不可欠であると考えようになった。学生にもその重要性を伝え、実践につなげてほしいと願っている。

3. 教育の方法・戦略

私が看護教育において大切にしているのは、学生が多面的な視点から学びを深められるよう、「虫の目」「鳥の目」「魚の目」という三つの視点を授業の中心に据えることである。

看護教育において私が特に重視しているのは、「虫の目」「鳥の目」「魚の目」という三つの視点を授業の基盤に据えることである。これらは教員としての私自身にも、学ぶ学生にも必要な視点であり、多角的な視野で看護を捉える力を育てるうえで重要な概念である。

まず、「虫の目」とは、複眼的な視点を持ち、一つの事象を多角的に捉える姿勢を指す。看護は常に明確な正解が存在する分野ではなく、対象者の価値観や状況に応じて多様な解釈や対応が求められる。学生には、対象者の立場や背景を丁寧に観察し、細部に目を向けながら主体的に学びを深める姿勢を身につけてほしいと考えている。

次に、「鳥の目」は、俯瞰的視野を持ち、学びの全体像や位置づけを把握する力である。学生が現在取り組んでいる内容がカリキュラム全体のどこに位置し、将来どのように臨床実践へつながるのかを理解できるよう、授業設計の中で学習目的や背景を明示することを心がけている。

最後に、「魚の目」は、水中の流れを読むように、社会の変化や時代の動向を敏感に捉える視点である。看護の知識や技術は常に更新されるため、教科書の記述が最新とは限らない。医療・福祉・社会の動向を踏まえ、現場の実際に即した教育を行うために、日頃から情報収集を怠らず、教育内容のアップデートに努めている。

これらの教育方針を具体化するため、私は以下のような方法を実践・検討している。

これらの教育方針を具体化するため、私は三つの視点に基づき、以下のような教育実践

を行っている。

まず、「虫の目」の視点として、重要語句を PPT の穴埋め形式にし、教科書を参照しながら書き込む活動を取り入れることで、学生が細部に注意を向けながら理解を深められるよう工夫している。また、隣同士で答えを確認し合い発表する協働学習や、学生自身が関心のあるテーマを調査・発表する活動を通して、多角的な視点と主体的学習を促している。

「鳥の目」の視点としては、重要事項を事前課題として提示し、授業前に基本知識を整理してくるよう促すことで、学習内容の位置づけを俯瞰できるようにしている。さらに、事前・事後テストを実施し、学習の到達度を可視化することで、学生自身が学習の流れを把握できるよう支援している。

「魚の目」の視点としては、医療・福祉の動向を踏まえた事例を授業に取り入れ、理論と実践の接続を意識づけている。また、学会参加や文献調査を通して教育内容を更新し、時代の変化に応じた教育を提供できるよう自己研鑽を続けている。

このように、多面的な視点を基盤に、学生とともに学び続ける姿勢を大切にしながら、教育に取り組んでいきたい。

4. 学習成果

1 年生および 2 年生を対象とした基礎看護学の演習では、代表教員によるデモンストレーションを視聴するだけでなく、学生同士が看護技術を相互に実践する機会を設けている。患者役となった学生が実際に技術を受けることで、「対象者の気持ち」を体感し、看護技術の背景にある配慮の重要性を理解するきっかけとなっている。

また、昨年度に掲げた改善目標である「参加型授業の導入」について、今年度は授業内で問いかけや小テスト、ペアでの意見交換などを試行した。導入当初、学生は恥ずかしさから発言をためらう様子がみられたが、回数を重ねるにつれて発言が増え、徐々に躊躇が少なくなっていく。学生が授業に主体的に参加し、自ら問題を解こうとする姿勢が見られ、周囲の学生にも良い影響を与えていた。これらの変化は、参加型の学習活動が学生の学習意欲や理解の深化に寄与した結果であると考え

5. 改善のための努力

こうした学習成果を踏まえ、今年度はさらに学習の質を高めるための取り組みを進めたい。特に、ナーシングスキルⅠ・Ⅱのように「講義と演習がセットになった授業」では、講義内容がそのまま演習での理解や技術習得に直結する。そのため、講義内での学習がより実践的な理解につながるよう、参加型の講義手法を積極的に取り入れる予定である。

具体的には、問いかけやクイズ、短時間のペアワークなどを通して学生の主体的な参加

を促すとともに、演習につながる実技の根拠や裏付けを講義内で丁寧に確認し、技術の背景にある考え方を理解できるようにする。また、患者の状態によって看護ケアが異なることを理解できるよう、「状態の違いによるケアの選択」を示す場面を増やし、学生が状況に応じて判断する力を育てられる授業づくりを目指す。

6. 今後の目標

今年度の改善の方向性を踏まえ、短期的にはナーシングスキルⅠ・Ⅱにおいて参加型の講義手法を複数の授業で試行し、学生の反応や学習成果を分析しながら、より効果的な方法へと改善していきたい。特にナーシングスキルⅠでは日常生活援助の技術を扱うため、学生が「患者の状態をしっかりとアセスメントしたうえで看護ケアを提供する必要がある」ことを理解できるよう、講義内で状態判断の視点を明確に示す授業を心がける。長期的には、看護教育において重視している「虫の目」「鳥の目」「魚の目」の三つの視点を、講義と演習の両面で体系的に取り入れ、学生が多角的に物事を捉え、柔軟に考える力を育成できる教育方法を確立することを目指す。そのために、教材開発、授業デザインの改善、現場の動向を踏まえた教育内容の更新を継続し、学生の学びをより深める教育実践を行っていききたい。

【添付資料】

湘南医療大学保健医療学部看護学科 2026 年度シラバス

湘南医療大学大学院保健医療学研究科保健医療学専攻 修士課程 2026 年度シラバス

湘南医療大学大学院保健医療学研究科保健医療学専攻 博士後期課程 2026 年度シラバス